



高崎高校における 運動部の現状と今後



司会(高橋) 本日は高崎高校から桜井校長、坂田運動部長、鳥居事務局長の三名をお招きして翠巒体育会の座談会を開催いたします。

それでは最初に、山口会長よりご挨拶をお願いいたします。

山口会長 桜井校長をはじめ、坂田運動部長、鳥居事務局長の皆様にはお忙しい中ご出席いただきありがとうございます。前回、こうした意見交換の場を設けたのは平成四年のことで、早いものでそれから七年が経過しています。今回、翠巒体育会側としては比較的若手のOBをメンバーに選びました。せっかくの機会ですので、忌憚のない意見交換ができればと思っております。

司会 引き続きまして、桜井校長より一言お願いいたします。

桜井校長 このような貴重な場にお招きいただいたことに感謝申し上げますとともに、翠巒体育会の皆様には常日頃から一方ならぬバックアップを賜り、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

さて、私が高崎高校に着任して一年余りが経ちました。その間、生徒の活動を見て感心するのは、何事にも一生懸命取り組むということだと思います。学校活動には、勉強だけでなく部活動や翠巒祭、体育大会等いろいろございますが、そのいずれにも熱心で、しかも切り替えが早い。終わつた後、グラダラすることなくさつと切り替えができることが、進学校でありながら部活動も活発化している要因のひとつだと考えております。

山口会長 本題に入る前に、いい機会ですので、桜井校長が教育方針として掲げられる「心のふるさとを持つ」と、「地域社会のリーダーとしての資質を磨く」についてお伺いしたいと思います。

桜井校長 地域社会のリーダーということについて考えてみますと、先生方やご父兄の間には高生の生徒は将来的に企業のリーダーにという想いが暗黙のうちにあると思います。それはそれで非常に大切なことですが、私の唱える社会のリーダーにはもうひとつ別の意味があります。

私はこれまで、県の教育行政に携わる中で小中高の学校を全体的に見たり、青少年課長としていろいろな青少年の問題に接してきました。そうした経験を通して強く感じたのは、地域社会との関わり方の問題です。小学校では多少の関わりがあるものの、中学校、高校と進むにしたがって地域との関わりが薄くなっていくようです。それが、たいへん気になります。子供たちは、いずれどこかの地域で社会人として生活を始めるわけですから、そのとき、地域に貢献できる大人になれるかどうか。そうした観点で学校教育の面からも大切ですし、青少年の育成と

いう面からも重要です。高生としても、そうした地域社会との交流をどう進めていくか、それを考える時期に来ていると思います。今年の四月の全職員を集めた場でも、とにかく生徒達を地域に出させる機会を創ろうと呼びかけました。例えば、地域の活動にボランティアで参加したいというのであれば、運動部で大会に参加するのと同様に出席扱いにすることで参加しやすくしてもいいと考えています。そうした地域活動を体験することで、いままでと違ったモノの見方や考え方ができるようになり、将来的に必ずプラスになると思います。

また、現在でも青少年関係の団体の皆様と話す機会がありますが、その人たちからも「なぜ中学生や高校生になると参加させたくないんですか」といった切実な訴えをよく伺います。要するに、現状のままでは自分たちに続く後継者が育つてこないという危機感を持つているわけです。勉強や部活動と同様に、地域活動に参加するための時間を生み出す努力をすることも大切だと思っております。

●総体で五年連続総合三位をマーク中…

司会 それでは、本題に入りたいと思えます。まずは、運動部長の坂田先生より今年の高校総体の結果についてご報告いただきます。

坂田運動部長 今年の高校総体に関しては、陸上の競技がまだ終了していませんので、現時点までの途中報告になることをご了承いただきたいと思います。

本校は過去五年間、いろいろな競技でまんべんなく得点を重ねることで総合三位の

座を確保してきました。今年も現時点では総合三位をキープしていますが、得点的には67.5点と昨年の最終得点である86点よりも20点ほど低くなっています。陸上の結果しだいでは四位に落ちる可能性があるというのが現況です。

競技別では、例年活躍しているバスケット部が今年も優勝と期待通りの成績をあげてくれましたが、全般的には新人戦でシールド権が確保できなかったことで早い段階で強いシールド校と対戦するなど、善戦虚しく昨年より奮わない運動部もいくつかありました。関東大会への出場も、例年よりは少ないといった感じですが、ただ、本校の特長であるいろいろな運動部がそれぞれの持てる力をフルに發揮して下位でも入賞して得点を積み重ねるといったいい面は続いているので、インターハイに向けて、さらには来年に向けて頑張ってくれと期待しています。

なれば運動のために多くの時間を割くというのなかなか難しくなりますから、運動に対する欲求のある成長期にこうした時間を設けるのは非常に意義のあることだと思います。これからも学習にマイナスと考えるのではなく、限られた時間を工夫しながら運動に対する価値を認めることで素晴らしい成果が生まれてくるのではないでしょうか。

桜井校長 今の話に補足して運動部の現状を数字的に見ますと、現在本校には18の部と1つの同好会(バドミントン)があり、全校生徒968名中514名、つまり約53%が運動部に所属していることになり、一年生だけに限れば、実に64%近くが運動部です。他校では入部してもすぐに辞めてしまうことが問題になるケースが少なくありませんが、本校では退部する生徒が少ないのも特長のひとつだと思います。

ただ、運動部とは逆に文化部に入った一年生は14%あまりと少なく、来年以降文化祭に影響が出るのではと心配しております。各先生方の話を受けて、お集まりいただいたOBの方から意見や感想をいただきたいと思えます。まず陸上部OBの廣田さんからお願いいいたします。

廣田 こと十年くらいを振り返ってみますと、陸上部は非常に素晴らしい顧問の先生に恵まれてきたと言えます。現役時代に選手として活躍され、指導者としても実績を残されている先生方にご指導いただいたことで、実際われわれの時代よりもいい成績を上げています。

しかし、指導していただいている先生の実績から考えると、もっと頑張っていた



さて本題のバスケット部ですが、お陰様で今年も優勝することができました。伝統的ななぞか強くて、毎年安定してベスト4に残っています。勉強に関しても、いまの生徒はすごいというのが実感です。私たちの頃は、もつとのんびりしていたと思います。確かに私たちの時代も県で優勝はしましたが、関東大会では通用しませんでした。また、校長先生が指摘されたように、地域への参加という面ではほとんど実績がありませんでした。高崎のことにしても、学校を卒業して地元に戻ってはじめて知ったという感覚があります。現在の生徒は要求されるハードルが高くてたいへんだと思いますが、勉強や運動と並んで地域にも積極的に関わってほしいですね。

司会 剣道部OBの藤木さんお願いいいたします。

藤木 現在、痛切に感じるのはサッカー人口が急増しているのに対して剣道人口が減少していることです。道場経営も成り立たなくなっています。そういった意味で、サッカーの盛り上がりはうらやましい限りです。ただ、そうした状況の中でも、高校の剣道界のレベルは上がっています。高高にして、専門家が指導している他校に取り残されないよう七年前から部活動に民間の派遣講師を受け入れ、四年前三三年前と十数年ぶりに関東大会の出場を果たしました。関東大会でも、なかなか内容のある剣道を展開していたと思えます。もつとも、最近はまだ低迷しているようです。その群馬県も、関東のレベルから見るとまだまだなので、いつその奮闘を期待しています。

司会 野球部OBの清水さんお願いいいたします。

お願いいいたします。

橋爪 余談になって恐縮ですが、高高が頑張っているのは男子校であるということが健全に機能している結果だと思っております。(笑)

ます。

清水 ここに今年の高校総体の成績一覽があります。野球の名前はないわけですが、野球の場合は、高体連とは別に高野連という組織がありますから仕方がないんですが、私も高校生のときはそのことにさみしさを感じた記憶があります。その代わりと言っただけですが、野球は世間から注目される度合いが大きい。県予選からテレビ放映があつたり、結果は必ず新聞に出る。当時は、そうした注目度の高さに対する意識を持つて野球に取り組んでいたと思います。でも、一番励みになったのは、顧問以外の先生方や他の運動部の生徒などへ全校挙げて応援していただいたことです。

一方では、現在の野球部は少年野球の延長線上のようになっているのを感じます。どこに行くにも、父兄と一緒に歩いて行くといった状況です。学校の負担や先生の負担を考えれば、そうした父兄の協力も大切なのかもしれません。が、われわれの頃からは考えられないことです。親には、一度見に来ただけで「一度と見に来たくない」と言われたくらいです。(笑)

指導面に関しては、廣田さんがおっしゃられたように榊見部長や佐久間監督をはじめ、たいへん恵まれています。今年の春の大会でも、優勝した桐生一高とほぼ互角に近い戦いをしたということで、夏は大いに期待できると思つています。ぜひ先生方にも、応援に駆けつけていただきたいと思つています。サッカー部OBの梅沢さんお願いいたします。

梅沢 清野さんの代役ということで自分では役不足かなとも思いましたが、せつぷく

の機会です。で参加させていただきました。

私がサッカー部に在籍していた頃は、顧問の先生がサッカー専門の方ではありませんでしたので、現高崎経済大学の高橋先生が指導に来てくださり、そこその成績を残すことができました。現在は坂田先生の手腕をたいへん素晴らしいチームができてインターハイ出場という快挙を成し遂げました。私も京都まで応援にいき、楽しい想いをさせていただきました。非常にレベルが上がっていると思つています。また、こうした場に出席して感じるのにはOBの方々の結束力です。とかく選手たちは自分たちの力だけで勝てたと思いがちですが、OBの方の温かいサポートがあつてはじめて素晴らしい活躍ができるんです。私も翠巒と名の付いた運動部で活動できたことが誇りであり、大きな自信になっています。

バレー部に関しては、私から意見を述べたいと思つています。

バレー部は昨年、インターハイそして国体に出場することができました。各部のOB会や翠巒体育会、そして高崎高校やPTAの皆様にはたいへんお世話になり、この場を借りて改めて御礼申し上げます。また校長先生には、予選から全国大会まで欠かさず会場に応援に来ていただきありがとうございます。今年、総体に関しては、昨年の活躍から新チームの結成が遅くなつてしまったために、ひさびさに関東大会出場を逃すという残念な結果に終わりました。

加えて、バレー部のOBは大会に応援に出かけ他校の生徒と接する機会が多いんですが、そこで感じるのには高生である以上練習時間が短くて当然だということです。

与えられた時間の中で、いかにその時間を価値あるものにできるか。生徒たちにはOBとして「短い時間の中で工夫して、長い時間練習している学校に勝つのが高生で運動をしているおもしろさだよ」と言い聞かせています。ですから、指導を担当される先生方には生徒たちができる限り有意義な時間を与えていただきたいと思つています。

また運動部以外の同級生から「運動部のOBには帰れるところがあつていいよな」とよく言われます。つまり、運動部が校長先生の言われる「ふるさと」になっているわけです。これからも運動部が高高の、そして地域のふるさとへと広がっていく出発点であり続けてほしいと思つています。

山口会長 よく文武両道と言いますが、確かに両立させるのは難しい面もあります。しかし、卒業してから身につけた勉強以外のもの大切さは、運動をしてきた人でなければわからない部分があるのではないのでしょうか。例えば、いかにいい仲間、人間と知り合うか、つながるかということが人生の中で一番大切なことではないかと私は思ふんです。そして、そうした機会をどうしたら創れるのかを考える中で、そのシステムのひとつとして翠巒体育会を位置づけることができます。今日は、81期生にも参加していただいています。こうして世代を超えて交流していきけるのも運動部のいい点だと思つています。各運動部の縦のつながりにしても、こうした横のつながりにしても自分たちの貴重な財産になっています。さらに、校長先生の言われる「心のふるさと」という面でも運動部は重要な存在です。そうなるために、自分のこと以外にも一生懸命にな

れるお節介を焼く人間がたくさんいたほうがいいですね。

一方、体育会の今後としては歴史の浅い運動部との交流をどう広げていくかが課題だと思つています。その辺に関しては、運動部のキャプテンだった方を紹介していただくなど情報提供の面で学校側にご協力いただきたいと考えております。

桜井校長 はい、それは協力して当然のことだと考えております。

●保護者会の是非について

司会 他に何かご意見はございますか。

藤木 先ほどの清水さんの話に戻って恐縮ですが、少年野球のように父兄が面倒を見すぎるとするのは、他の運動部にも見られることです。剣道部に関しても、他の学校には保護者会のような組織があるようですが、高高にはありません。私はなくていいと思つています。それとリンクして、練習時間についても短いほうがいいと思つています。親が面倒見て手取り足取りやって長時間練習すれば強くなるかもしれませんが、それでは意味がありません。最近の保護者は、私に言わせれば母性が強すぎるのではないのでしょうか。もう少し父性を押し出す必要があると思つています。

廣田 実際に子供が少なくなつて親にも時間の余裕があるからかもしれないませんが、それは高校だけの問題ではなくて大学でも同様です。大学の父兄会も、金銭面も含めてものすごいものがあります。時代の流れかもしれないですね。

司会 保護者会の問題に関して、学校側はどうお考えですか。

坂田運動部長 その問題は父兄がどこまで手を出すかということ、種目の特性もあると思います。

高高の保護者会に関しては、父兄からの要望もあって私が赴任4年目の頃につくったのですが、行っていることは試合を見に来たり、親同士がたまに集まったりといった程度です。練習に手を貸したり、合宿について来たりといったことはまったくしていません。



陸上部(65期) 広田誠四郎



学校長 桜井直紀

ただ、保護者会がまったく意味がないかと言えはそうではないと思います。親の理解を促進させるという効果があるのでないでしょうか。子供はやりたくて運動に取り組んでいるわけですから、それを精神的に支えてくれる保護者会の存在は重要です。高高は進学校ですから、かつては部活に入っていることを親に言えなくて練習試合にも行けないということもあつたようです。今でこそ少なくなりましたが、親も保護者

会を通して子供のやりたいことを理解することができると思います。

桜井校長 保護者会は増えているようですが、高高では坂田先生の言っているレベルで止まっています。もつともそれは、高校生というレベルだからということがあるかもしれない。ヘタをすれば、小学校などでは父兄の声のほうが強くなってしまっているケースも見受けられます。でも、応援団のレベルであれば問題はないと思います。



野球部(75期) 清水 正郎



運動部長 坂田 和文

また現代は、保護者の理解がないと子供もやっつけていけない時代でもあるように感じます。昔なら「それは言ってもオレはやるよ」と言うことができた生徒がいまはほとんど。(笑)

橋爪 呼び方によるイメージの問題もあるのかもしれませんが。かつては「体育」と呼んでいた時代から、最近では「スポーツ」と呼ぶように変わってきています。親としては「体育」というと教育の一環としてのイメージ

であまり口をはさまなかったのが、「スポーツ」ということで子供と一緒に楽しみたいと考えるようになってきたのではないのでしょうか。

清水 親としてみれば、自分の子供が中学生になって運動部に入って少しでも上手くなるう、試合で勝とうと努力して伸びている姿を見るのが楽しいということがあるんだと思います。その一方で、中学生高校生のときに、勝つ



バスケット部(75期) 橋爪 良真



事務局長 鳥居 吉二



サッカー部(81期) 梅沢 克久



会長(58期) 山口 正敏

●「推薦入試制度」の改革について
廣田 運動部強化の一環として推薦制度がありますが、現実には優秀な生徒が入っているんでしょか。
桜井校長 まず推薦入試という言葉は今年が最後で、来年からは推薦という言葉を使わなくなることをご報告しておきます。
さて、今年の状況を見ますと高高の場合、推薦ワケは定員の20%ということで64名に

それに対してスポーツ全般では、親にもかなり知識豊富な方がいますので、関心が持てるし、いい意味で温かい見方もできるのではないかと思います。

また清水さんの言う「勝つ」ということで、たとえ負けても勝つために全力を尽くしていく経験を積むことは大切なことではないか。



司会/バレー部(78期) 高橋 浩生



剣道部(69期) 藤木 正行



高崎高校時代を想う

小淵恵三内閣総理大臣政務秘書官

古川 俊隆 (62期・陸上部)

特別寄稿

なります。そのうち運動で素晴らしい成績を上げた子供は今年、36名が入学しています。もちろん、いくら運動に優れているといっても、入学して勉強面についてこれない学力では困ります。来年からは推薦という言葉を使わず前期選抜というカタチになります。数の上でもトータル的には64名を予定しています。ただ、これまでは勉強面と運動

面の二つの観点からの選抜でしたが、文化面での能力を選抜の要素に加えたいと考えております。梅沢 推薦という言葉が使われなくなるというのですが、これにはどういった理由があるのでしょうか。桜井校長 これまで推薦という言葉を使っていたため、どうしても中学校の先生から「推薦します」というカタチがないとシステ

ム上からいつて受験できませんでした。それが前期選抜というカタチにすることで、本人がこの学校でこういうことがしたいと希望すれば受験できるようになるわけです。司会 自己推薦というわけですね。桜井校長 その通りです。普通科ですから学区の厳しさは残りますが、この改革でいまままで以上に希望者が出てくると期待しています。

山口会長 そろそろ予定していた時間になったようです。本日は率直な意見を賜り誠にありがとうございます。この座談会での意見交換を糧に、翠巒体育会としてもよりいっそう学校並びに運動部をバックアップして参りたいと考えておりますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

ないことですが、陸上部の歴史の中でも最も沈滞ムードが漂っておった時代ではなかったかと思われま。

バラ園、そしてポプラ並木、広びろした校庭、そして登校、下校の時にながめた上毛三山が走馬灯のように浮かんでまいります。そして応援歌翠巒を思わず口ずさんでおることがあります。

陸上競技自体が個人種目中心で自己主張の強い、マイペース型の人物が多いのが普通ですが、少人数の為、大変家族的で監督の内田先生、そして現在日経新聞の役員をされておる明石光一郎先輩や、全電通労組の幹部となられておる白石健一先輩、そして同期の岩田和弘君、鈴木邦彦君等には大変御世話になりました。又、部員の人数が少なく活力不足の為、合宿の時など指導に来てくれた先輩方を喚かせたものでした。

現在の私は、福田越夫先生、中曾根康弘先生両大先輩の後を継ぎ群馬から三人目の総理として戦後最悪と言われる日本経済を立てなおすため、経済再生内閣と云う看板を掲げ、日夜頑張っておる小淵恵三総理のもとで政務秘書官を努めております。

しかし、部室が隣どうしで、他のクラブの仲間とも非常に親しくなり、三十年以上たつてもかわらぬ友情をいただいております。これは何もものにもかえがたい貴重な財産だと思えます。

そして関東周辺では京浜同窓会の皆さん、そして地方にまいますとOBの皆さんが暖かく声をかけて下さり支持率がいま一つの私どもにとりまして、大いに勇気づけられております。

高々と云うところは、進学校のためには、いざ卒業し故郷を離れてみるとなつかしく思い出されます。

現在の陸上部は高橋賢作先生のもとインターハイに何名もの選手を送り出し、文武両道の伝統を守ってくれていると聞いて大変嬉しく思っております。

井上房一郎翁が丹精込めて造り上げた

翠巒体育会そして高崎高校の益々の御発展と在校生の皆さんの御活躍を心から祈念致します。

高崎高校翠巒体育会の先輩の皆さん、同輩、後輩の皆さんには、日頃の御無沙汰をまずもっておわび申し上げます。又、この機関紙を定期的に発行されるにあたり大変な御苦労をいただいております。山口会長兄他事務局の方々に感謝と敬意を表します。私は昭和三十五年に入部、さっそく陸上部に入部させていただきましたが、この高々ではご多分に漏れず「偉そうなおことは」とても口にはできない学生でありました。なにせ先輩諸兄には申し訳



柔構造の妙——ご挨拶にかえて



高崎高校教頭

福田 賢 吾

この度、翠巒体育会の会報第十八号が発行され、また、体育会自身は発会して二十四年目を迎えている由、ほとんど四半世紀に及ぶその活動はまさに敬服するに値いたします。同時に、その活動を可能にするエネルギーは何かと思うところでもありません。

私は去る四月、高崎高校にお世話になるまで五校を経験しましたが、その間高校生を見ていて考えることがありました。

それは何かといいますと、生徒がハードな日々をみごとに凌いでいくということとあります。「みごと」と表現するのは問題があるかも知れませんが、誰が見てもみごとでなかったり、またみごとと見えても当人にとっては、進路や部活動、さらに人間関係などで苦闘し、「ほうほ

ご挨拶にかえて

うの体で何とか終ったのだ」と呑気な私の方に見方に噛みつきたいほどだという人もいそうです。しかし私は、みごとであり、悪戦苦闘の末であれ、とにかく難事たること十分な日々を高校生が乗り越えることを「みごと」といいたいです。

このところ、人間の柔構造ともいえる質を思うことがあります。人間は物として見れば柔らかいものだから柔構造であるなど当り前のことです。従って、その当り前のことを日々過していくことと重ねて再認識したという方がこの場合当てています。いかに柔構造か？人は直線を引けません。いくら注意しても人の引く線は結構曲った線であります。指や腕が柔構造であり、従ってその動きが柔らかいからです。その為人は直線を引くの定規という硬構造物を必要とします。

人間のこの柔性は線を引くには不便ですが逆に多くの長所を持っています。柔軟であるが故に、物にぶつかっても衝撃が大きくないこと、各種の刺激(打撃)に対して回復力があることなどです。この柔構造は人の知能、能力にもその特性を及ぼしているらしく、その点を追って考えてみるのも面白いと思われれます。

さて、中学から高校へという六年は生徒にとって生やさしい時期ではありません。多くの場合楽しかった小学校とくらべ、中学の諸々はより厳しいというのが一般的です。さらに高校では質の違いは一層際立ったものになります。教わる科目は一段と難しく、また扱い方が具体から抽象へと変わり、部活動も水準が高く、専門性が増します。学校にあるものだけでなく、手ごわい相手になるというわけです。進路など将来のことも頭を悩ませます。

こうして見ると、高校の三年というのは、容易ではないということがまず先にあるように思います。楽しいだけとか苦労などないという高校生がいたらよほどその人は恵まれているか、或いは真剣に毎日を生きていない為に感嘆いをしていくかのどちらかでしょう。このように生徒が負う課題は手ごわく、一方それは、

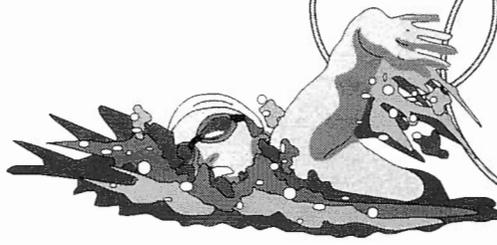
生長していこうとしている彼等にとつては重要かつ必要なものです。まさに修業時代と呼ぶことができます。そしてそれを苦しみながらもどう切り抜けていくのか、それを可能にするのは何かと思うのであります。そこで、先に述べた人間の柔構造がこのことに関わりがあるのでは

ないかという気がいたします。学習であれ部活動であれ、打撃(苦勞)を受けとめて大きく破壊されない柔性です。疲労に打撃を凌いで回復する柔性です。疲労からの回復力といつてもよいでしょう。そしてこの打撃(刺激)と回復の繰り返しが生徒という修業時代であり、その間に青年の成長があると思うのです。ところで、人が皆持っている柔構造もさすがにある時期から硬化してきます。私などまさにそうで、そんな私の目から見ると、課題を凌ぎに凌ぐ高校生の柔性はみごとにものに見える訳であります。彼等を薔薇の若い枝と見るならば(若芽はこの上ない柔構造をしています)、一人前になるべく、柔らかい枝は課題という苦勞の風雨を必要としているのでしよう。

さて、翠巒体育会のことです。会員の皆様はすぐれた柔構造をもつて高時代(高時代)の風雨を凌ぎ、現在それぞれのお立場で活躍されています。文字通り文武の道を歩んで来られたことが今でも揺らぐことのない自信の元となっているのでしようし、それは皆様に共通した思いであります。私は体育会活動の源泉をそこに見ます。

五月の総体を中心とした大会で、高は僅差で四位、総合三位はなりませんでしたが、文武の道を征く後輩は頼もしく続いております。彼等が翠巒体育会の皆様に負けず有為の人材に育っていくことは間違いありません。同時に後輩を暖かく見守って頂くことを先輩の皆様にお願ひ申し上げます。

水泳部



青春の絆

水泳部と私

永尾 俊弘(70期)

これといったスポーツ歴のない私と、水泳の出会い、ちよつとした錯覚によるものでした。小学生の頃、城南プールで夏休みの間になんとなく自己流で泳げようになつた私でしたが、片岡中学二

年の時たまたま参加した校内水泳大会にて、一〇〇m自由形だったと記憶しておりますが、水泳部の選手だった石川達(高々70期)と五角の戦いを演じたことあります。(記録は一分三〇秒台、現在のスイミングスクールの選手では小学校三年生程度)もしかしたら、水泳にたいへんな才能があるかもしれないと錯覚し、高崎高校入学後、すぐに水泳部に入部いたしました。当時、新入部員は十数人おりました。練習を始めて中学時代水泳部だった同級生(関根明、久保誠、坂坂直人君等)との差に気づき愕然といたしました。当時一日におよそ三〇〇〇mを練習で泳いだと記憶しておりますが、水泳部の練習というのは泳力の差と関係なく同一メニューをこなすことですので、当たり前ですが六〇秒サークルで五〇m自由形のトレーニングを行いますと、一回四〇秒で泳げる者は二〇秒間休め、呼吸もある程度整い筋力もある程度は回復した後に練習を再開でき、比較的楽にメニューをこなせますが、一回五〇秒でしか泳げない者は最初から十秒程度しか休息できず、呼吸も整わず筋力も回復しないままに練習を再開することとなり、ますます一回にかかる時間が増加し、最後にはほぼ連続して休息のないままに泳ぎ続ける状態となり、非常に過酷な練習となつてしまっています。

現在も続いているようですが、梅雨時の合宿は、冷たい小雨の中、午前六時に起床し湯気の立つプールで早朝練習を、授業終了後ただちに本練習を行い一日におよそ八〇〇〇〜一〇〇〇〇mを泳ぎま

したが、結局初心者であった私にとつては、泳ぎ切るだけでたいへんな苦難でした。特に、一年生の時の合宿の辛さの記憶は、今でもなお鮮明にのこつております。あまりの厳しさで、当時でも廃屋としか思えない建物の二階の合宿所(私が三年時に取り壊されました。)で、練習が終わりあとかたづけ等の雑事が終わると、私自身は疲労のため早々に寝いってしまった。後に聞くところによると、夜間いろいろと楽しい事もあつたようですが、私には合宿の夜の記憶がまったくありません。

お忙しかつたにもかかわらず、現水泳部OB会長、新谷恭一(54期)先輩をはじめ小此木勝(56期)、秋池宗一郎(65期)、小茂田猛(67期)等の諸先輩が、連日のように泊まり込みで来られ、練習中に叱咤激励、時にはデッキブラシ振上げて厳しく指導されており、恐ろしい部に入つてしまったと後悔しきりでした。

今振り返れば楽しい思い出ですが、そういった単調で辛い練習のためか、あるいは後述する水の冷たさのためか、合宿のころを境に十数人いた同級生も一人や二人やめとしないで少なくなり卒業時には私以外には関根明、桜沢正行、根本隆、真下照行の四君のみとなつてしまいました、今も残念に思つております。

現在でこそ巷間には温水プールが普及し、いつでも暖かい水の中で練習できますが、当時は五月中旬より、皆さんもご存じの屋外プールで練習を開始しました。五月の水は冷たく(水温一七℃前後)

まず水に入るのに大変な勇気がいりました。更に、泳ぐときには、冷たいというよりはむしろ肌を刺すといった感覚のなかで、練習を行いたいへん辛かつたと記憶しております。今でも練習終了後のたき火の炎が、たいへん懐かしく思い出されます。この水の冷たさにたいする嫌悪感は大変なもので、私自身およそ十年間高校、大学(医学部のため六年制)で現役の水泳部員として過ごしましたが、やはり五月、六月の練習は常に辛いものでした。単調な練習と水の冷たさのためか、大学時代も部員の歩留まり率は、年間三〇%前後だったと記憶しております。

現在、私自身も高崎イトマンスイミングに所属し、マスター大会等に参加しておりますが、高校、大学時代の水泳仲間に出会うことはほとんどありません。やはりみな水の冷たさが忘れられないめかとおもわれます。

私自身も高校卒業時には、もう冷たい水とは縁を切りたいなと思つておりました。一浪後、昭和四十七年に群馬大学に入学しましたが、入学式の日には群馬大学水泳部に所属していた鈴木達夫先輩(68期)に強引に勧誘され、即日また水泳部に入部してしまい、結局六年間という長い期間冷たい水とおつきあいすることになりました。その時、私と群馬大学に同時入学した高々水泳部の私の前任の主将だった小野里薫先輩(69期)が、やはり水はもうこりこりだといって、群馬大学水泳部には入部しませんでしたが、当時やはりなと思いました。大学時代には、高々水泳部の後輩たちが、何人が群馬大

学に入學し、私自身も積極的に勧誘しましたが、私の力不足もあり水の冷たさを理由に拒否されました。

その中で、小俣等君(76期)のみが入部し、大学時代もクラブメイトとして苦楽をともしました。

高校三年間の競技歴については、とにかく当時の高々水泳部は弱小で、私が一年、二年生の時は、県大会で全員予選落ちでといった状態でした。私が三年生で

主将のとき、片岡中学校の後輩でもある角貝皆人(72期)が入部して、はじめて入賞者がでるといった始末でした。角貝君はとにかく頑張り屋で、三年生の僕らでも閉口するような練習メニューを淡々とこなし、プールでの泳ぎも特徴的で非常に馬力にとんだものでした。現在も時々マスコミ等で名前を見かけ、あいつはすごい奴だったんだなあと感心しております。

胡吉明先輩(54期)が大変喜んでおられたのが今はなつかしく思い出されます。しかし、そういった時代には残念ながらも一般OBが、練習に口を挟む余地はもはやなくなってしまう、自分達のころの合宿と比べ時の流れを感じました。

平成十年日本水泳連盟が、年齢別バッチテスト制を設けました。四〇歳代の一級は、二〇〇m個人メドレーで三分四〇秒というタイム設定となっております。

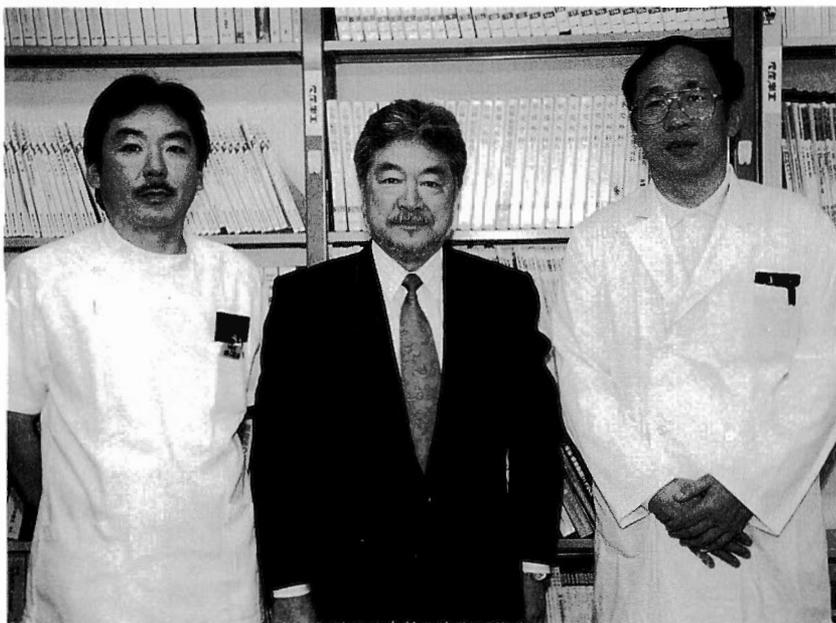
たいへん良いことだと考え、昨年一年間わたしはそれを目標として水泳のトレーニングを行いました。そのかいあってか、平成十一年三月の記録会ではみごとに三分十一秒というタイムで合格できましたが、泳ぎ終わったあと、頻脈発作(180/分)頻呼吸(50前後/分)となり、さらに全身の筋肉疲労も加わり、しばらくはプールから出られなくなってしまうました。回復におよそ三時間もかかり、現役時代との大いなる落差を感じました。現在、他の水泳部OBにもバッチテスト受験を勧めておりますが、まだ小見忠司(73期)しか合格していないのが残念でなりません。

で練習を続けていることが重要なのかと考えました。高校時代の現状では、確かにかぎられた期間に集中的にしか練習できず、今の現役がうらやましく思われま

す。

私事ではありますが、およそ十年前に自爆の交通事故おこし、いわゆるむちうち症となり頭痛、吐き気、めまいに一時苦しみました。そんな折り、医局のローテエションでたまたまのぞみの園(国立コロニー)に一年半勤務しました。国立の施設のためか、園生のために完備した二五mの屋外プールがあり職員も使用してよいという事で、それをきっかけに水泳を再開いたしました。すると、固有背筋および頸部の筋力がついたためか、いわゆるむちうち症状は全快いたしました。そういったこともあり、現在もなお泳ぎ続けているのであります。

最後に、縁あって、平成四年より真木病院(高崎市筑縄町七一)に内科医(循環器、特に高血圧)として勤務をはじめました。驚いたことに剣道部OBの真木俊次(55期)、バスケット部OBでインターハイ出場経験のある真木武志(72期)の両先生がおりに翠巒体育会との不思議な縁を感じております。



写真左から真木武志(72期)、真木俊次(55期)、筆者(70期)

大学入学後、私も鬼の先輩として合宿の折りは高々を訪れましたが、不思議なことに私の卒業後しばらくして、高々水泳部のレベルが著しく向上し、県のインターハイで連続優勝するようになりました。顧問となった丸山博先生(68期)の優秀な指導、また、群馬スイミングスクールのヘッドコーチとなったばかりの小茂田猛先輩の猛烈な指導のたまものであったと思われま。今は故人となつてしまいましたが、当時の水泳部OB会長多

私自身、現在なお生涯スポーツとして水泳をとらえ、週に二〜三回近くの高崎イトマンスイミングで泳いでおります。専門であった平泳ぎはさすがにもう記録は伸びませんが、それ以外の種目(クロール、背泳、バタフライ、個人メドレー)の記録は、驚いたことに四〇台後半となつた今も年々縮んでおります。自分なりに考察してみますと、やはり一年中同じ環境(温水プール、水温二十七℃前後)



O B 会 の 活 動



卓球部

堤 康高(71期)

卓球部OB会は、現役との卓球大会とゴルフコンペの二つを、毎年の行事として行っていました。今年はそのどちらも行いうことができませんでした。

近年になく低調な年になってしまいました。今年には何十年ぶりに参加された方も多くあり、定例メンバーでの会合からは脱却できました。今後OB会行事への参加を約束して頂けたので、来年からは、もう少し活発な活動ができると思います。

今回、集まる機会が減ったのを反省して、OB会活動を盛り上げたいのですが、それには「執行部の努力」と「会員の積極参加」が不可欠です。

執行部が努力していないわけではありませんが、「コンペの案内がない」とか、「新年会の通知が遅すぎる」といった不満があるのは承知しています。二五〇人を越えるOBの数に比して、執行部が小人数であるために、「現在の運営ではすでに限界に達しているのではないか」とも思います。

そこで、卓球部OB会では「コミュニケーション手段」を電子メールに変えていきたいと思えます。今後、行事案内の何割かがメールの送信で済むだけで、事務負担は大幅に削減されます。また、リアルタイムの伝達ができるので、気運の盛り上がりつつあるうちにやり取りができる。OB会が身近になる。更に、コストが安い。などの利点があるためです。

今回は卓球部OB会のメールアドレスを用意できませんでしたので、とりあえず卓球部OBでもある山口翠巒体育会会長のメールアドレスをお借りしてメールを受けたいと思えます。
(tariku@mail.wind.ne.jp 御自身のメールアドレスを連絡して下さい)

新年会への出席予定者などを掲載しておけば、懐かしい名前を見つけて参加希望者が増えるのではと期待して、専用のメールアドレスのほかにホームページを設けたいと思っています。

十月予定のゴルフコンペと一月予定の新年会の案内はホームページ上で行えるよう準備を進めています。

軟式庭球部

山崎 和廣(68期)

軟式庭球部OB会の主な活動としては年に一度の現役との交流試合及び懇親会と総会です。

平成十年度は八月十五日(土)に行われました。

昼の母校テニスコートでの現役との交流試合には二十名近くのOBが参加され、例年になく若手の参加も多く現役との交流試合も真剣そのもので活気あるものでした。夜は駅前の長谷川ホテルにて総会・懇親会が開かれました。毎年参加されている方、初参加の方、皆青春の思い出に花を咲かせ楽しい時を過ごしました。又、平成十年度は翠巒体育会主催による第八回翠巒体育会ゴルフ大会に軟庭部として初参加しました。皆忙しい中七名のOBに参加して頂き、結果団体戦において二位、個人戦はみごと62期の遠藤潤氏が優勝され初参加ながら素晴らしい成績でした。

今年は何となくところによると正式に軟庭部OB会として発足して二十年目にあたるようです。それ以前から大先輩達によ

バレーボール部

岩丸 高明(82期)

平成十年度のバレー部OB会活動報告を致します。

前号でも報告致しましたが、昨年度は現役達と十八年ぶりにインターハイの出場を勝ちとり、OB会として忙しい夏を過ごしました。応援くださった翠巒体育会の皆様、またその他のOBの皆様にも深く感謝申し上げます。現役達も高々の伝統を力強く感じられたことと思います。話は変わりますが、OB会ホットニュースがございます。平成十一年五月群馬県六人制クラブカップ選手権にて、OBチームの翠巒クラブが、十二回目の優勝という快挙を為し遂げました。十一年連続優勝のあと、若いチームの台頭により二年間優勝から遠ざかっていましたが、気持ちだけは衰えず、エース高橋浩生、セッター菊地俊哉(ともに78期)の春高バレー組の活躍により、みごと頂点に返り咲きました。現役も然る事ながら、翠巒クラブも常に県内トップクラスの活躍を続けております。

今後、これら二チームのますますの活躍を祈念し、OB会活動を続けて行きた

いと思います。

ラグビー部

上羽 正弘(72期)

高崎高校ラグビー部OB会は、木村洋会長二期目を迎え、本年一月三日高崎ビユーホテルにおいて新年総会を開催。昨年度OB会活動及び決算報告ならびに本年度事業予定が発表され、すべて承認された。また、総会に先立ち高々グラウンドでは、恒例となっている現役対OB戦が行なわれ、白熱したゲームが繰り広げられた。三月一日には卒業式の後、三年生部員に対して、木村会長よりOBとなった証しとしてエンブレムを贈呈し、卒業を祝った。

最後に、誠に残念な報告をしなければなりません。ラグビー部OB会理事長である加藤定男氏(70期)が、五月二十五日早朝、通勤途上交通事故により亡くなられました。加藤氏には、今後さらなる飛躍が期待されていただけに誠に残念であります。心よりご冥福をお祈りいたします。

硬式野球部

江原 功(77期)

現在約三〇〇名の会員を持つ、私共野球部OB会の活動を紹介します。

①四月〜六月の間にOB総会を開催致します。席上期間の活動方針等を決定するわけですが、OB会としてはまず現役の活動に出来る限り協力する事を第一と考える為、部長・監督の御出席を願ひ現役の活動状況の報告ならびにOB会に希望する事等話し合いOB会として出来る事を決定致します。

②夏期大会前の現役の激励会、私共OBとして一番願っている事は、夏の甲子園出場でありますので差し入れ及び食事会を行ない大会での活躍を願うと共にOBとの親睦をはかります。

③OBによる現役の指導、OB間で連絡を取り合い役員を中心出来る限り母校のグラウンドに向きます。

④前高野球部OBとの定期戦、年一回行ないますが先輩・後輩が往年の素晴らしいプレーを披露して熱戦を繰り広げます。(もちろん硬式ボールで！)

⑤ゴルフコンペの開催。
⑥年間十回程度の役員会。以上の様子を年間を通してOB相互、OBと現役の親睦を図る為、日々活動を続けております。

応援部

富田 和弘(85期)

応援部OB会は、本年一月十四日高崎ビユーホテルにおいて、現役応援部の顧問の先生を招き、盛大に催されました。また、秋にはゴルフコンペを実施して

います。参加数があまり多くないので、ひとりでも多く参加できる環境づくりを努めています。他に翠樹祭に行われるリーダー公開祭時および野球の夏予選時には、現役の援助をしております。

新年の全体同窓会や高々運動部顧問の先生方を交えた懇親会の席で、校歌や応援歌「翠樹」のリーダーをさせていたただいております。私たちのリードで、集まった同窓生OBの方々が高々々に斉唱し、志気を昂め、結束を新たにする光景を見る度に、「高々生の誇り」を実感致します。これからも、社会で活躍される同窓生OBの方々にエールを贈り続ける存在でいられるようなOB会でありたいと思うとともに、伝統ある高々応援部OB会の更なる発展を目指していきたいと思っております。

サッカー部

清野 哲雄(74期)

本年もすでに、一月二日の初戦会と一月十六日の総会・新年会が無事行われ、現在、九八期生が卒業して、総勢五〇六名の所帯となりました。

翠樹クラブは、昨年の群馬県社会人サッカーの三部リーグでは、九勝二敗の好成績ながら三位となり、あと一步で二部昇格を逃しました。体制を整えて、昇格を勝ち取るよう期待しています。

また、ミドル翠樹クラブは、好成績が続いていますが、楽しくサッカーでき、必ず試合に出場できますので、参加希望

の方は御連絡を下さい。

今夏は、第八回の高高・前高サッカー部OB会交流試合を、八月中旬に前高主管にて行う予定です。是非ともOB会員には、奮って御参加頂き、真夏の日差しの中で楽しんで頂きたく願ひします。

最後に、現役サッカー部への物心両面に渡る援助を心からお願ひ申し上げ、OB会員の皆様には、現役の練習や試合に応援の程よろしく願ひ致します。

バスケット部

橋爪 良真(75期)

平成十年度高々バスケットボール部OB会の活動を簡単にご報告いたします。

特にかわった行事は行わず、例年どおりでしたが、まずは五月末に総会。今回は初夏の観音山慈眼院に二十名が出席。

その後は夏・秋と二回のゴルフコンペを開催しました。恒例の市民大会への参加は本年は断念しました。

年が明け、元日早々から現役との交流試合。現役には不評ですが、若手OBにとっては年始代わりともいえる不可欠の儀式です。今年は約三十名が参加しました。三月の現役卒業生の追出し会に会長以下役員四名が臨席。

その他年間を通じて役員会を数回開いております。すでに十一年度に入っておりますが、先

の県総体で現役が優勝し関東大会出場を決めてくれました。インターハイ出場への期待も高まります。現役の活躍を励みとして、彼らへの援助と応援を続けたいと思います。

水泳部

小見 忠司(73期)

平成十年

6月13日 現役合宿激励交流

於・高々浦

6月13日 水泳部OB会総会

於・八島町あき

6月25日 翠巒体育会総会 三名出席

7月12日 水泳部OB会ゴルフコンペ

於・ロイヤルオーク

7月14日 翠巒体育会ゴルフコンペ

三名出席

10月20日 翠巒体育会報告掲載申

込

2月23日 翠巒体育会総会 三名出席

特筆

本年度より(財)日本水泳連盟による泳力検定制度が設けられ高崎市内でも既に二回実施されました。受験資格は、「定期的に水泳の練習をしている健康な者」。

一級〜三級にランク付され一級の受検種目は二〇〇m個人メドレーのみ、三級は四泳法より一つ選択、五〇mを競技規則に従い泳ぎます。基準技粋のとおり加齢により難易度が上がることはありません。

受験料三〇〇円で立派な認定証が発行さ

れます。水泳部上がりでなくとも十分勝算有り、皆様にお勧めいたします。

*泳力検定制基準表(抜粋)

検定日	男子	二級200m	男子三級50m
満年齢	男子	20歳	15歳
30	39	4分10秒	1分01秒
40	49	4分20秒	1分06秒
50	59	4分30秒	1分11秒
60	以上	4分45秒	1分16秒

(小見忠司・73期)

剣道部

戸塚 泰聖(77期)

この一年間、剣友会にとって色々な事がありました。悲しい出来事としては、戦後の高々剣道部の創設者である網中先生が昨年九月に亡くなりました。先生が高々で指導しておられた間、剣道部は数々の大会で優秀な成績を残しました。

良い知らせとしては、飯野さん(74期)が六段を、笠井さん(56期)が七段を取得されました。

恒例の活動としましては、一月三日の新年初稽古にOBが十五名参加し、現役生と稽古を行ないました。今年も現役生の数が少ないため、OB同志の練習が数多くできました。夕方には、総会及び新年会が行なわれました。三月の二十七・二十八・二十九日に、現役生徒の春合宿が行われました。この時も、稽古会には、多数のOBが参加し、現役生には良い練習となりまし

習となりました。

陸上部

波多野重雄(77期)

小林 馨先生を囲んで

昭和四十二年度から五十三年度まで、陸上部の監督をされた小林馨先生が、昨年、群馬県スポーツ功労賞を受賞されました。在任中にお世話になった、65期から79期までの陸上部OBで、受賞をお祝いする会を五月二十九日にビューホテルで行いました。

先生が着任された当時三年生だった、岩上安孝先輩を初め、79期で高々最後の教え子となった齋藤新吉君までほとんどの学年で切れ目なく総勢二十二名が出席した盛大な会となりました。岩上先輩が挨拶の中で「先生というより、兄貴のような存在だった。酒の飲み方や女の口説き方で教えてもらった」という豪快な先生の姿は、十二年たった高々最後の年まで変わらなかつたように思います。また、先生もご挨拶の中で「陸上の指導者としての今の自分があるのは、高々での十二年間があったからだ。」とおっしゃっていたように、参加者全員の心には「高々陸上部小林馨先生」という図式が深く刻まれています。参加者全てが、一二次会、三次会と、心ゆくまで懐かしい時を振

り返った一夜でした。

柔道部

鳥居 吉二(73期)

平成十一年のOB会の活動も、正月三日の現役・OBの合同練習から始まりました。当日は、若手のOBの参加者多数により現役選手の動きも活気が出ているようでありました。ほとんどの参加OBが、現役選手と同じ稽古メニューをこなし指導にあたっていました。ストレッチを充分取り入れた準備運動、寝技の反復練習、寝技乱取り、立技打込み、立技乱取りと続きました。身体が充分ほぐれたところで恒例の紅白試合(団体勝ち抜き戦)を行いました。若手OBの奮闘により、大熱戦が展開され、多いに楽しむことが出来、またケガ等もなく無事終了しました。

続いて場所を移し、市内ビューホテルにて、新年総会を行いました。現役選手には激励食事会の後、自己紹介及び活動の抱負を一人ずつ述べてもらいました。OBの温かい視線の中で熱く夢を語る姿は頼もしく感じられました。

今回OB会総会は、関口会長が、鬼石町長四期目の当選を果たし、その祝賀会を兼ねたこともあり、話題に事欠かず大いに盛り上がりました。各世代のOBがそれぞれ入り混りアルコールの勢いも借りて、十分に懇親と情報交換が出来ました。

先輩がんばっています。

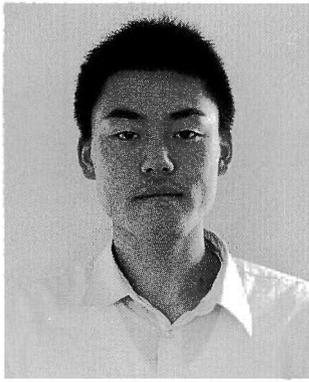
平成十一年度

総体優勝の感想及び今後の抱負

バスケット部

強豪三校を制し優勝

主将 小澤 朋克



優勝を信じ臨んだ新人戦、前橋商業に終始リードを奪いながら残り〇秒で逆転され、二位に終わった。同時に高校総体の組み合わせが決定し、我々の再スタートが始まった。高校総体では、優勝を狙う強豪三校と戦わなければならなかった。一月から五月の多くの遠征合宿で力

を付け、高校総体を迎えた。

怪我人もおり万全とはいえなかったが、初戦からいい形で大会に入れた。四回戦までは順調に勝ち上がった。一つ目の山は準々決勝の太田工業戦だ。スピードがあり得点力の高いチームである。しかし試合は高々ベース、失点を抑え66-58で勝利。チームは波に乗った。

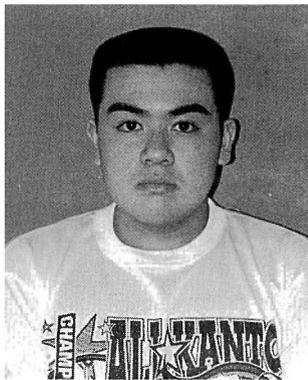
準決勝の相手は個人能力が高くサイズのある高崎商業。前日の試合で波に乗った高々は前半からリードしそのまま61-45で快勝した。波に乗ったまま決勝だ。相手は新人戦優勝の前橋商業である。ここまで来たら負ける気はしなかった。前半はリードを許したが、後半に逆転し62-54で二年ぶりの優勝を決めた。

この優勝は、チームが一丸となった結果であり、先生や父母その他多くの人々のサポートがあったからこそ成し得たのである。この勢いで、我々の最終目標であるインターハイ出場を決めたいと思う。



覇者の条件

マネージャー 塚本 浩史



決勝の相手は、新人戦で「完敗」した前橋商業だった。覇者となり過去を振り返ると、「何故、新人戦は...」と思った。「雪辱」—そんな言葉が脳裏をよぎったが、私はその言葉を振り払った。この戦いは、「確認」だ。

やはり、新人戦を控えた時期に、覇者となりえる態度ではなかったのだ。練習内容、取り組む姿勢、日常生活、精神と身体の調整など、覇者となるために必要な条件を十分に満たしてはいなかった、と改めて実感し、今回の総体は条件を満たせた、と確認し、今後の全国予選にむけて実行していこうと決意した。

条件を満たすことは難しいことだと承知している。完璧でなくてもいい、だが、限りなく条件を満たそうと努力することが最も重要だ。結果が全ての世界に生きていくけれども、努力は必ず結果につながる。と信じ、最後まで監督や顧問の先生

テニス部

ダブルス優勝して

新井 洋



去年八月の新人戦でのダブルス優勝から八か月、総体の本戦のドロースの第一シードのところ自分達の名前があった。それを見たとき、うれしさの反面、責任感も感じた。そして高崎上並榎のテニスコートで大会が始まった。

初戦、二回戦、準々決勝と順調に勝利、その日の試合を終えた。三日後、前橋の

方、仲間そして自分を信じようと思いきす。
最後に、日々御世話になっている同窓会の方々や諸先輩方、PTA及び諸先生方に厚く御礼申し上げると共に、今後とも応援の程よろしくお願い申し上げます。

県総合スポーツセンターに場所を移し、準決勝、決勝が行われた。準決勝も6-1で快勝。残すは決勝となった。相手は富岡高校の大庭・荻原ペア。新人戦の決勝の再現となった。相手が絶対調だったので僕達も気合いを入れて決勝に臨んだ。序盤リードされたが逆転、接戦を7-15で勝利し、「優勝」の栄冠を手に入れることができた。僕達が優勝できたのは強い日差しの中、自分のことのように応援してくれた仲間の力も大きな要因だったと思う。

新人戦につづいて総体でも優勝できたことは僕達にとって大きな自信となった。関東大会では、県の代表、学校の代表、そして応援してくれる仲間の代表としての自覚をもち、全力でプレーしたいと思ってる。

関東大会へ向けて

酒井 隼樹



じりじりと照りつける日射しの中、県



総合スポーツセンターで決勝戦が行われた。決勝は、県新人戦と同じく富岡の大庭・荻原組。二度目の対戦となった。前回あっさり勝ってしまったせい、今回は油断し、前半二ゲーム先行されてのスタートとなってしまった。確実に対戦相手は成長していた。予想しなかった対戦相手の二ゲーム先取であせってしまった。だが、あせりを相手に悟られまいと

冷静さを装い、とりあえず、一ゲームずつ丁寧に試合運び、自分達のプレーに徹しようと思っけた。ゲーム展開は常にシーソーだったが、終盤、チャンスボールを正確に決め、積極的に攻め、ついに勝利を手中に収めた。だが、辛勝だった。

この大会で関東大会出場の手配に手を入れた。強豪揃いの関東大会で、自分達の力を十分発揮し、上位を目指して頑張りたいと思う。
また、目前に迫るインターハイ予選も制し、インターハイ出場の切符も勝ち取りたいと思う。



四百個メ 新井
二百自 黒田
四百R 金井・中西・新井・黒田
(4種目とも決勝に進出できず)
県高校総体
二百個メ 新井
二百自 黒田
四百メR 金井・中西・新井・黒田
四百R 金井・中西・新井・黒田
八百R 松本・角田・新井・黒田
学校対抗
県新人大会
五十自 林
四百自 落合
四百自 上野
百バタ 小宮
四百R 松本・林・角田・湯浅
二百R 林・角田・湯浅・波辺

1 回戦 高崎○1人残 桐一
2 回戦 高崎○1人残 高工
準々決 高崎×3人残 興陽
5 位
◎剣道部
インターハイ県予選
(団体)
1 回戦 高崎2―1青英
2 回戦 高崎1―4前西
(個人)
石井 1 回戦負け
金井 2 回戦負け
選手権大会
1 回戦 高崎3―0太工
2 回戦 高崎2―2青英
3 回戦 高崎1―2高北
1 年生大会
1 回戦 高崎 不戦勝 高商B
2 回戦 高崎 0―2前商A
新人大会
2 回戦 高崎0―5桐生
◎軟式野球部
夏季大会
1 回戦 高崎2―12長野原
新人戦
2 回戦 高崎0―7前商

1 回戦 高崎5―0勢多農
2 回戦 高崎3―0高経附
3 回戦 高崎0―3前橋育英
(個人戦) 小暮
60kg級 小暮
インターハイ(香川県高松)
(個人戦) 60kg級 小暮
1 回戦 棄権勝ち・土田(富山)
2 回戦 一本勝ち・前田(三重)
3 回戦 優勝勝ち・丹野(山形)
準々決 一本負け・高山(沖縄)
5 位入賞
新人大会(点取り)
1 回戦 高崎4―1桐南
2 回戦 高崎2―3富岡
新人大会

◎柔道部
関東大会
予選 高崎1―0日川高校(山梨)
高崎2―2市立船橋(千葉)
(内容負け)
インターハイ県予選
(団体戦)
1 回戦 高崎5―0勢多農
2 回戦 高崎3―0高経附
3 回戦 高崎0―3前橋育英
(個人戦) 小暮
60kg級 小暮
インターハイ(香川県高松)
(個人戦) 60kg級 小暮
1 回戦 棄権勝ち・土田(富山)
2 回戦 一本勝ち・前田(三重)
3 回戦 優勝勝ち・丹野(山形)
準々決 一本負け・高山(沖縄)
5 位入賞
新人大会(点取り)
1 回戦 高崎4―1桐南
2 回戦 高崎2―3富岡
新人大会

◎弓道部
関東大会
団体 予選落ち
インターハイ予選
団体 予選落ち
新人大会
2 回戦 高崎0―7前商
◎テニス
個人 岡本
団体 岡本
インターハイ県予選兼高校選手権
団体戦
県高校新人大会
ダブルス 酒井・新井組
シングルス 酒井
新井

1 回戦 高崎○1人残 桐一
2 回戦 高崎○1人残 高工
準々決 高崎×3人残 興陽
5 位
◎空手道部
インターハイ予選
個人形 茂木 予選落ち
瀧川 予選落ち
個人組手 茂木 1 回戦
瀧川 1 回戦
新人大会
1 回戦 高崎5―0安中(棄権)
2 回戦 高崎1―4前橋

◎硬式野球部
春季県予選
1 回戦 高崎11―2玉村
2 回戦 高崎10―5高崎東
3 回戦 高崎5―6農大二
全国高校野球選手権群馬大会
2 回戦 高崎5―4前橋
3 回戦 高崎5―2利根商
4 回戦 高崎6―4前橋商
準々決 高崎4―7前橋工
秋季関東大会県予選
1 回戦 高崎5―7桐生
春季大会県予選
1 回戦 高崎10―6渋川工
2 回戦 高崎1―6桐生第一

◎バスケット
2 回戦 138―13尾瀬 3 回戦 165―24安
中 4 回戦 108―21新島 準々決 66―
58太田工 準決勝 61―45高商 決勝
62―54前商 優勝 関東大会へ
◎バレー
4 回戦 2―0高東 準々決 0―2高
北
◎ソフトテニス
(個人) 中川・大崎組 第3位 岩佐・山
口組 9位 関東大会へ

◎卓球
1 回戦 3―0安中 2 回戦 3―0桐
工 3 回戦 1―3館林 第9位
◎ラグビー
準々決 91―0渋川 準決勝 0―79農
二
◎サッカー
1 回戦 5―0高商 2 回戦 5―0新
島 3 回戦 5―0富岡 4 回戦 0―
1前商(延長) 第9位
◎山岳
第10
◎柔道
(個人) 桜沢 第5位 高坂 第9位 (団
体) 2 回戦 5―0桐南 3 回戦 0―
4常磐 第9位
◎剣道
2 回戦 4―0渋工 3 回戦 0―3高
商 第9位
◎軟式野球
1 回戦 1―4太田
◎弓道
(個人) 岡本 準優勝 関東大会へ
(団体) 岡本 3位 関東大会へ
◎テニス
(個人) 複 新井・酒井組 優勝、単
酒井 3位 関東大会へ
(団体) 2 回戦 3―0常磐 3 回戦
2―0桐生 準々決 1―2太田 5位
◎空手道
1 回戦 2―3前橋
◎バトミントン
2 回戦 0―2前商
◎陸上
一五〇〇m 4位(中山) 八〇〇m 5位
(中山) 一一〇mH 7位(北嶋) 四〇
〇H 3位(北嶋) 走幅跳 2位(石野)
一〇〇〇m 4位(石野) 四〇〇mR 7
位 棒高跳 3位(稲垣)、8位(高田)
(個人) 6位以内(関東大会へ)

◎ソフトテニス
(個人) 中川・大崎組 第3位 岩佐・山
口組 9位 関東大会へ

第34回高校総体成績一覧(11年度)

◎ソフトテニス
(個人) 中川・大崎組 第3位 岩佐・山
口組 9位 関東大会へ

◎ソフトテニス
(個人) 中川・大崎組 第3位 岩佐・山
口組 9位 関東大会へ

翠 巒 体 育 会 役 員 名 簿

(平成 10.10.31)

	氏 名	回	住 所	電 話	学 校 側 顧 問
会 長 副 会 長 々 々 (剣道) 々 々 (ラグビー) 々 々 (バスケット) 々 々 (会計) 々 々 (会計) 会 計 監 査 々 々 顧 問 々 々 々	山口 正敏	58			学 校 長・桜井 直紀 教 頭・福田 賢吾 運 動 部 長・坂田 和文
	秋池 宗一	65			
	川手 義昭	62			
	◎横田 茂	55			
	◎塚越 章	58			
	◎木村 洋	59			
	◎林 進一	72			
	庭田 登志男	68			
	佐藤 義夫	58			
	高橋 浩生	78			
	丸山 功一	60			
	◎廣田 誠四郎	64			
	◎国峯 善次郎	50			
	◎若田 武雄	53			
◎清岡 水貞	30				
理 事 陸 上 卓 球 軟 式 庭 球 バ ス ケ ッ ト バ レ ー ラ グ ビ ー サ ッ カ ー 水 泳 柔 道 剣 道 野 球 応 援 山 岳 硬 式 テ ニ ス ス キ ー ・ ス ケ ー ト 弓 道 空 手 軟 式 野 球	◎横尾 信男	65			高橋賢作・山口和士・関根正弘 加藤 聡・品川和男・田村知恵 浦野克彦・関根正史・工藤正宏 立見賢治・町田 仁・水上光久 宮川淳吾・毒島 健・関口穂積 櫻井 清・長岡秀一・関口博士 坂田和文・丸山直樹・塩原秋雄 橋本晃一・松本正志・丸橋 寛 鳥居吉二・箕輪 明・中村博昭 戸塚泰聖・関口 理・宮崎秀明 樽見尚人・佐久間秀人 大須賀誠一・田村 仁・関口 理 植原政明・田村修一・三木保江 柴田 栄・齊藤政一・毒島健一 丸山直樹 塚越 究・松本正志・三木保江 小林政幸・猿谷亮司・丸橋 寛 天野正明・宮崎秀明・飯野良二 柴崎浩明・三浦昭久・木本陽子 女屋 浩・関根正弘・小林政幸
	◎坂本 正樹	71			
	◎深沢 昇	57			
	◎根岸 博昭	68			
	◎下山 万吉	63			
	◎丸山 博	68			
	◎橋爪 良真	75			
	◎榑原 一好	79			
	◎佐藤 弘之	81			
	◎岩丸 高明	82			
	◎掛川 稔	82			
	◎加藤 定男	70			
	◎上羽 正弘	72			
	◎阿久 沢 茂	69			
	◎赤羽 英光	73			
	◎清野 哲雄	74			
	◎新谷 恭一	54			
	◎小此木 勝	56			
	◎関口 茂樹	63			
	◎東瀬 朝紀	69			
	◎寺沢 保正	83			
	◎藤木 行彦	69			
	◎飯野 政一	74			
	◎小池 均	77			
◎小山 一郎	69				
◎清水 正一郎	75				
◎小林 均	77				
◎永井 功	65				
◎堀口 清	65				
◎秋山 賢治	74				
編 集 部	藤井 正弘	81			
事 務 局 事 務 局 長	◎鳥居 吉二	73			
	◎櫻井 清	81			
野 球 バ レ ー	◎川鍋 順一	52			
	◎菊地 俊二	52			

◎は各部OB会長。

◎◎編集後記◎◎

今号は久しぶりに学校側と翠巒体育会若手役員との座談会を企画しました。出席された学校側はもとより我がメンバーのすばらしい考え方、行動に感銘いたしました。前向きな非常に内容のある座談会でした。現在、日本で一番忙しい人の一人であろう古川俊隆氏(62期)に特別寄稿を御願いたしましたところ二つ返事で引受けてくれました。誠に有難いことです。

先日高々へ放課後五時頃用事で行ったところ、野球、硬・軟テニス、ラグビー、サッカー、と校庭に溢れるばかりに多数の生徒が真剣に整然と練習にはげんでいました。あの光景を見て現社会の不景気を一瞬忘れ、すがすがしい気持ちになりました。たまには高々のグラウンドに行ってみてはどうですか、みなさんも。(丸山・60期)

翠巒体育 第十八号

平成十一年六月三日発行

翠巒体育会事務局

〒三七〇〇八六一

高崎市八千代町二四一

群馬県立高崎高等学校内

電話

〇二七(三三四)〇〇七四

制作 発送 (株)スパン